

2020年度日本語サマーコース 中級文法の授業実践報告

梅 本 佳 子

要 旨

本実践報告では、2020年度サマーコース中級で担当した文法授業において実施した取り組みとその効果について検証した。主に（１）Canvasの機能を利用した事前課題とその効果、（２）授業の進め方と使用したツールの説明を中心に報告する。（１）の事前課題は文法の授業内容に直接的な関与はないが、コース初日の授業という位置づけから、自己紹介の課題を出したものである。Canvasのディスカッション機能を使用して自己紹介を記入してもらい、それによって初日のグループ別自己紹介がスムーズになることを目的としたが、コース開始前の課題であったため、課題が出ていることに気づかなかった受講生も多かった。（２）の授業の進め方では初級の復習から中級まで項目の中で扱うようにし、できるだけレベル差のある受講生に対応できるようにした。また、確認クイズとZoomのチャット機能を使ってできるだけ双方向性のある授業になるよう試みた。

キーワード

オンライン授業ツール、CANVAS、LMS活用

1. はじめに

2020年度は新型コロナウイルスの影響により、多くの留学希望者が渡日できず本国で待機することとなった。日本語学習の停滞が懸念される状況の中で、名古屋大学国際言語センターでは日本語を学ぶ機会を設けることを目的としてサマーコースがオンライン開講された。本実践報告では筆者が担当したサマーコース中級の文法の授業での試みについて報告する。

2. サマーコース中級について

2. 1 サマーコース中級の概要

サマーコースは入門・初級・中級の3つに分かれて実施された。中級の概要は以下である。期間、授業時間、使用プラットフォームなどは入門、初級と共通である。

- ・期間：7月27日から8月7日の2週間
- ・授業時間：週5コマ（90分 / 1コマ）
※申込者数が多かったため5-6限のダブル開講となった
- ・科目：文法1コマ、視聴解2コマ、読解2コマ（計5コマ）
- ・学習者：Canvas^{注1}に登録されていたのは102名であったが、実際の受講者数は5限6限を合わせて50数名だった
- ・使用プラットフォーム：Canvas
- ・双方向性のツールはZoomを使用

申込数が多数あったため5限と6限のダブル開講となったが、申込者数が必ずしも受講者数と同じではなく、コース開始前の人数の確定はできなかった。また、受講者のレベルは入門コースと初級コースの設定レベルに当てはまらないレベルを扱うため、初級中盤から上級まで幅広いレベルの受講生が参加することとなった。

2. 2 使用プラットフォームについて

使用プラットフォームのCanvasは、現行するLMS（Learning Management System）において比較的新しく開発されたソフトウェアであり、近年アメリカでのシェアが拡大している。

今回使用されたオープンソース版の基本機能は「ホーム」「アナウンス」「課題」「ディスカッション」「成績」「メンバー」「ページ」「ファイル」「要綱」「クイズ」「モジュール」があり、多くのLMSと共通する標準的な学習コンテンツを提供している。従来のLMSと比較して外部システムとの

連携性や画面操作性の良さ等が挙げられているが、コンテンツの日英対訳による日本語名称に関しては多少改善すべき点があることが指摘されている（富崎・藤本2017）（常盤2018, 2019）。

日本ではまだ導入例は Moodle や WebClass 等に比べて多くないが、海外での実績を考慮すると、今回のような留学生対象のコースには適合性があるかもしれない。

3. 文法の授業について

2週間のサマーコースの中で文法は週1回、月曜日に割り振られていたため、水曜日と金曜日のそれぞれの読解担当の先生がたと相談の上、両方の読解のテキストからいくつか重要な文型を選んで先行導入することにした。

コース申し込み時の受講希望者のデータにおいて、学生のコメントを入力した備考欄には多様な希望が見られたが、「話し言葉と書き言葉が上手になりたい」「論文を書く」「学术论文やレポートの書き方などを教えてほしい」などの意見もあり、読解のテキストから書き言葉の文法を中心に扱うことにした。

コースの初日ということもあり、事前の課題もどのくらいの人数が提出するか予想できず、反転学習のような事前の予習ありきの進め方は不安があったため、ZoomでMicrosoft PowerPoint(以下、PowerPoint)を画面共有し授業を進める形とした。実際、事前課題は、受講生がCanvasからの連絡を確認していなかったため期限後の提出も多かった。

初日である初回文法授業はまず簡単なコース説明ののち、自己紹介、文法という流れで実施した。最初にZoomのブレイクアウトルームでランダムにグループ分けをし、自己紹介の時間をとった。上級者と初級レベルの受講生が同じグループになる可能性もあり、事前にこのクラスの受講生のレベルが幅広いこと、初級の文法で自己紹介をすることを説明した。文法は初級レベルの受講生も含まれることを考慮し、説明は初級の復習から中級の文法へ移行するようにした。

4. 事前課題について

4. 1 事前課題のねらい

事前課題として初級の文法に制限した自己紹介の課題を出した。ねらいとしては、レベル差のある受講生が授業で交流するための下地作りがあった。

受講者のレベルについては、学生情報の意見欄に記入された N5から N4の間のレベルであるという自己申告と、N5合格者が数名含まれるという事前情報があったため、初級中盤レベルの学生が受講していることが予想された。反面、中上級レベルの受講生も学生情報からは窺え、レベルが幅広いことが予想されたため、交流では日本語のレベル差に配慮しある程度意思疎通できるようにする必要を感じた。担当した文法の授業日がサマーコースの初日であったため、自己紹介を授業の予定に組んでいたが、事前準備として初級の日本語を使って自己紹介を書いておくことで、交流の際、語彙や文法の選択がスムーズになると考えた。

さらに、お互いにどんな受講生がいるのか知る手がかりになり、緊張の緩和や親しみやすい雰囲気作りも期待できた。2週間という短いコースでは受講生同士が接する範囲も限られるため、お互いを知るツールとしても活かせる可能性があった。

課題は Canvas のディスカッション機能^{注2}を使用してコース開始4日前にアップロードした。

4. 2 効果

課題の期限は授業開始日の1日前、7月26日16時30分としたが、その時点で記入があったのは5限が17名、6限が7名のみだったため、記入制限のロックを外して自由に書き込めるようにした。最終的には、5限44名、6限28名の記入があり、期限後の記入には「Canvasをチェックするのが遅れた」「27日からスタートだと思ったので前日に課題がないと思った」「アナウンスの確認を忘れていた」などの理由が添えられているものもあった。5限と6限のそれぞれの受講者数の把握も期待の一つだったが、授業直前

や授業後の記入もあり難しかった。

初回の自己紹介をスムーズにする下地作りもあったため、「初級で勉強した文法を使って自己紹介をする」「4～5文で書く」と明記したが、ほとんどの学生が自由に記入していたため、あまりねらい通りの効果とは言えなかった。しかしながら、中級レベルの文法や語彙が見られ、受講生のレベルについて事前把握の一端となった。

また、ディスカッションには「いいね」をつける機能があり、自由につけられるよう設定しておいたところ、何人かが他の受講生の自己紹介に「いいね」をつけており、関心を持って読んでいたことが窺えた。

5. 授業の進め方と評価について

授業で扱った文法項目は以下の通りである。

初級中盤から中上級まで幅広い受講生がいることを考慮し、文法の説明は初級の復習から中級で扱うものへ関連づけるようにした。初級の復習を簡単に入れ、中級でも誤用が見られる運用まで触れ、できるだけ初級レベルの受講生には難しすぎず、中級レベルの受講生には簡単すぎないよう気をつけた。例えば1回目について(1)は、て形接続の確認から入り、その書き言葉として連用形接続を説明するといった形で導入できるため、初級の受講生にも非常に分かりやすい項目から始めることができた。また、多くの受講生にとって初級は復習となることを考慮し、中級レベルでも混乱の多い部分も取り上げるようにした。1回目の(2)は「～なくて」と「～ないで」の使い分けから入り、「～ず」「～ずに」まで、(4)「～そうだ」の様態と伝聞はそれぞれ前接の品詞との接続の違いの確認から、後続に名詞がついた場合の接続の違いについても説明した。初級から中級までなるべく多くの層に役立つよう考えた結果、文法項目が多くなり、90分の授業としてはやや盛り沢山なものになった。

1 回目の文法項目	2 回目の文法項目
(1) 動詞連用形接続	(1) ～し、～し
(2) ～ず、～ずに	(2) よう (推測・比喩・例示)
(3) 受身形	(3) ようになる・ようにする
(4) ～そうだ (様態・伝聞)	(4) ように・ために (目的)
(5) ～という、～といった	(5) ために (目的・原因)
(6) ～について、に対して、として	(6) ほど
(7) ～ざるをえない	(7) ～のではないか
(8) ～こそ	

5. 1 使用ツールについて

授業では PowerPoint を使用して①クイズで文法知識の確認、②説明、Zoom のチャット機能を使って③作成した短文を入力、という流れで授業を進めた。全ての項目についてこの限りではなく、最後にクイズをした項目もあるが、なるべくクイズと短文作成で受講生が活動的に参加できることを心掛けた。クイズは画面共有した選択問題を、答えが分かった受講生に直接答えを言ってもらい、正答を PowerPoint で画面表示する形で進めた。短文作成はその場でチャットに入力してもらい、読み上げて正しい使い方ができていればコメントをし、間違っていれば何が違うか、どうすれば正しくなるかを説明した。チャット機能の利点として、受講生側は共有画面を見ながらその場ですぐに入力でき、教師は入力された順にコメントできるため、タイムラグが少なく、シンプルで手間がかからないことが挙げられる。しかし今回、画面共有をしながらだと、入力がすぐに教師側のパソコンに反映されない場合があり、なかなか受講生の入力がなく、しばらく待ったが、実は入力していたのに表示されていなかったということがあった。

5. 2 Canvas のディスカッション機能を用いた感想・質問投稿

授業の後で Canvas のディスカッションに感想・質問の投稿ができるように設定した。1 回目の授業のあと、5 限目は 3 名、6 限目は 2 名の投稿があり、授業へのコメントと一緒に文法についての質問が書かれていた。

コメントは「例文が多いのがいい」「スピードがいい」「中級の文法を復習できた」というものと、「スピードがちょっと速い」というものがあった。質問は似た文法の使い分けに関するもので、授業で説明した事項そのままの質問が多かったため、授業での説明に追いつけていなかった可能性がある。2回目の授業も感想・質問の投稿ができるよう設定したが、こちらへの投稿はなかった。

6. まとめ

Canvas のディスカッション機能で授業の感想の記入ができるようにしたが、受講生の授業への評価について把握するには十分ではなく、授業時も Zoom の画面上に現れる受講生の反応はごく一部であり、対面授業に比べて、反応や成果が直接感じ取りにくいことは否めない。しかしながら、クイズへの回答の反応やチャットへの短文の入力は非常によく、熱心さが感じられた。2週間のコースの最終日にアンケートが実施され、サマーコース中級のアンケート結果は個別の授業にではなく全体的な授業へのコメントがほとんどだったが、中に、「文法の内容が多すぎ」というコメントがあり、2回の授業のうちにできるだけ多くの文法を入れてしまったことへの反省を深めた。

プラットフォームの Canvas は今回初めて使用し、準備期間で機能を把握するのが精一杯で、十分活用できていたとは言えず、他にもっとよい使い方ができたのかもしれない。オンライン授業は今年度多くの教育機関で実施され、多くの実践が試みられている。今回の授業について反省点も多くあるが、オンライン授業での1つの貴重な経験となり、今後活かしていきたい。

注

注1 アメリカ Instructure 社によって開発された Learning Management System (LMS)

注2 テーマについて教師や受講者が意見を投稿できるスレッド型ディスカッション

ン機能

参考文献

Instructure 社

<http://instructure.com/canvas/en-au>

ボウ・ネットシステムズ株式会社

<http://bownet.co.jp>

富崎おり江・藤本亮（2017）「法科大学院教育における LMS（Canvas）利用のための部内ルールの策定」『名古屋大学法政論集275号』 pp.407-418

常盤裕司（2018）「Canvas 調査報告—日本版 NGDLE プラットフォームとしての可能性—」『法制大学情報メディア教育研究センター研究報告 Vol.32』 pp.33-44

常盤裕司（2019）「最新の IMS 標準を実装する Canvas による授業改善の可能性—法政大学における事例研究—」『法制大学情報メディア教育研究センター研究報告 Vol.33』 pp.30-37

※ URL は2021年1月18日時点のものである